

2019 年度 授業改善アンケート実施報告

<全体の実施状況>

<科目群・科目種別の現状と課題> ※

- ・基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて
横田 佳之（大学教育センター長、FD 委員会委員長、理学部数理科学科 教授）
- ・情報リテラシー実践Ⅰ・Ⅱの授業改善アンケート等について
永井 正洋（情報教育検討部会長、大学教育センター 教授）
- ・実践英語の授業改善アンケートについて
吉田 朋正（英語教育分科会座長、人文社会学部人文学科 准教授）
- ・未修言語科目の授業改善アンケートについて
園田 みどり（未修言語科目担当、人文社会学部人文学科 教授）
- ・理系共通基礎科目の授業改善アンケートについて
中谷 直輝（理学部 FD 委員会委員長、理学部化学科 准教授）
- ・保健体育科目の授業改善アンケートについて
西島 壮（保健体育科目担当、大学教育センター 准教授）
- ・教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて
谷口 央（基礎教育部会長、人文社会学部人文学科 教授）

※ 2019 年度前期の結果に基づく報告。ただし、未修言語科目は後期にアンケートを実施しているため、2018 年度後期の結果に基づく報告となる。

2019 年度授業改善アンケート実施状況

1 調査概要

(1) 実施時期

前期：2019年7月8日～7月26日 後期：2020年1月6日～1月27日

(2) 実施対象科目

前期	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基礎科目群 <ul style="list-style-type: none"> ・ 基礎ゼミナール ・ 情報科目（情報リテラシー実践Ⅰ・ⅠA） ・ 実践英語科目（実践英語Ⅰa） ・ 理系共通基礎科目 ・ キャリア教育科目（現場体験型インターンシップは除く） ・ 保健体育科目 ○ 教養科目群 ○ 基盤科目群
後期	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基礎科目群 <ul style="list-style-type: none"> ・ 情報科目（情報リテラシー実践ⅡA・ⅡB・ⅡC） ・ 実践英語科目（実践英語Ⅱb） ・ 未修言語科目（ドイツ語Ⅰ・フランス語Ⅰ・中国語Ⅰ・朝鮮語Ⅰ） ・ 理系共通基礎科目 ・ キャリア教育科目 ・ 保健体育科目 ○ 教養科目群 ○ 基盤科目群

(3) 質問項目

問1：この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。

問2：授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

問3：授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習（授業に関連する書籍や新聞の記事を読む等）を含みます。

問4：この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください（複数回答可）。

問5：この授業について教員の工夫等、良かった点を書いてください。

問6：この授業について改善してほしい点を、可能ならば具体的な改善案も含めて書いてください。

問7：その他、この授業やカリキュラム全体および授業設備（机・プロジェクター・スクリーン・照明・PC・Wi-Fi・空調等）について、自由に意見を書いてください。

問8～問10：＜科目群・科目種別ごとの質問＞

問11・問12：＜教員ごとの質問＞

2 実施状況（前期）

(1) 全体

対象科目数：369 科目

実施科目数：332 科目

実施率：90.0%

履修登録者数：20,423 名

回答者数：15,603 名

回収率：76.4%

（対象科目における履修登録者数）

(2) 各科目群・科目種別

次頁以降を参照

基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて

大学教育センター長・FD 委員会委員長
横田 佳之

【はじめに】

基礎ゼミナールは、「調べる、まとめる、発表する」という能動的な作業を通じて基本的なアカデミック・スキルを獲得するとともに、討論・グループワーク等を通じて豊かな人間関係を構築し、コミュニケーション能力を磨くことを目的とする 1 年前期の必修科目で、今年度は 77 クラスが開講されました。

本稿では、FD 委員会・基礎教育部会が今年度前期に実施した授業改善アンケートにおける、基礎ゼミナールに関する結果の概要を報告します。

【調査対象と回収率】

調査対象は、受講学生および授業担当教員で、受講学生 1668 名中 1389 名（回収率 83.3%）、授業担当教員 77 名中 63 名（回収率 81.8%）の回答がありました。回収率は過去 3 年間横ばいですが、他の科目群と比較するとやや低い傾向にあります。

【アンケート結果の分析】

学生用アンケートでは、基礎ゼミナールの目標である自発的取組（問 8）、自己表現（問 9）、人間関係（問 10）に関する設問を設定しています。また、問 1～問 7 は他の科目群と共通の質問であり、汎用的スキルに関する自己評価（問 4）や、授業外学修時間（問 3）についての設問を設けています。

(1) 授業外学修時間（問 3）

この 3 年間ほとんど変化がありません。能動的な学修姿勢を重視する基礎ゼミナールとしては、0 時間が 25% という結果は少し残念です。一方で、90 分以上が 18% という結果は、他の科目群と比較してトップレベルにあります。

(2) 汎用的スキルに関する自己評価（問 4）

過去 3 年間のトップ 3 は、基礎ゼミナールで重視するコミュニケーション能力、情報活用能力、能動的学修姿勢ですが、修得・向上できたと回答した割合は、

	2017 年	2018 年	2019 年
コミュ力：	37.6%	42.1%	45.3%
情報活用：	32.3%	43.1%	45.4%
能動姿勢：	28.3%	28.4%	29.7%

となっており、着実に伸びていることがわかります。

(3) 自発的取組姿勢（問 8）

問題発見・解決における重要性を認識したか、という問いに対し、はっきり「そう思う」と回答した割合は、

	2017 年	2018 年	2019 年
	36.6%	37.0%	44.3%

となっており、着実に伸びていることがわかります。とくに 2019 年度の伸びが大きく、担当教員のみなさんのご努力の賜物だと思います。

(4) 自己表現能力（問 9）

議論や発表などの能力が向上したか、という問いに対し、「そう思う」或いは「ややそう思う」と回答した割合は、過去 3 年間横ばいですが、はっきり「そう思う」と回答した割合は、

	2017 年	2018 年	2019 年
	29.6%	35.3%	39.5%

となっており、やはり着実に伸びていることがわかります。今後の学修活動に活かしてほしいと思います。

(5) 良好な人間関係（問 10）

グループワークを通じて良好な関係を形成できたか、という問いに対し、はっきり「そう思う」と回答した割合は、

	2017 年	2018 年	2019 年
	35.0%	36.2%	42.4%

となっており、やはり着実に伸びていることがわかります。「ややそう思う」と回答した割合と合わせても、過去 3 年間、順調に伸びていることがわかります。今後の学生生活にも活かしてほしいと思います。

【自由記述欄より】

- 今年度、教員が行った具体的な工夫として、
- ・スマートフォン・タブレットを用いた情報共有
 - ・レポートを論文集として製本
 - ・クラウドツール・スプレッドシートの活用
 - ・kibaco の活用
 - ・学外活動の実施

などがありました。一方、学生アンケートの自由記述からネガティブな意見を拾ってみると、

- ・教員の話が長い
- ・発表の準備期間が短い
- ・授業の目的・目標を明確にしてほしい
- ・テーマが難しすぎる
- ・シラバスと内容が違った

などがありました。今後、基礎ゼミナール懇談会等で

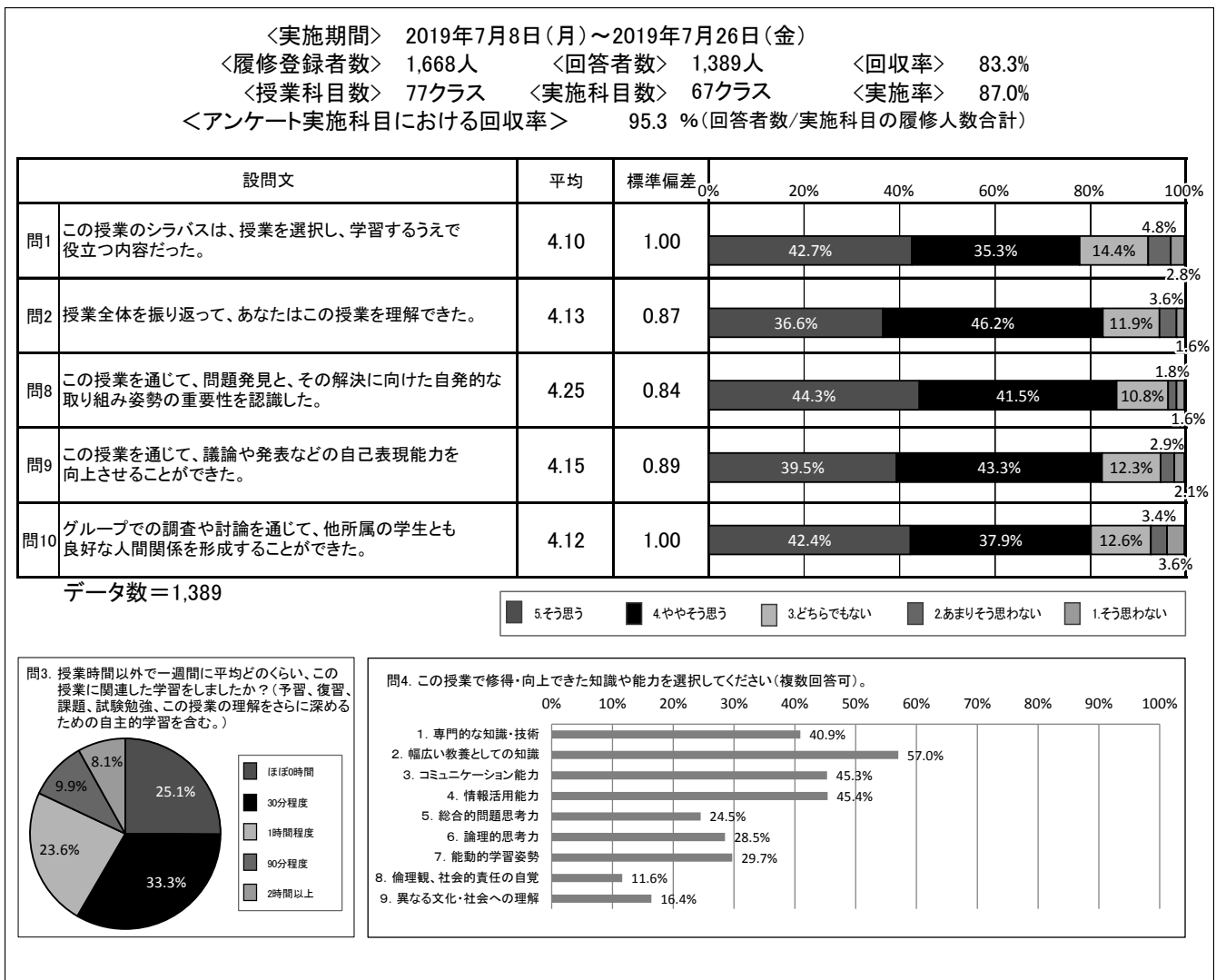
共有していきたいと思います。

- とはいえ、学生アンケートの自由記述の大部分は、
- ・グループワークが楽しく、理解が深まった
 - ・プレゼン・ディベート等、能動的に学修できた
 - ・学生の主体性を尊重してくれた

など、非常にポジティブなコメントです。担当教員のみなさんのご尽力に、心より感謝いたします。

【おわりに】

基礎ゼミナールの授業評価結果をみると、学生の満足度も高く、授業の目的もある程度達成されていると感じます。ただ、授業のテーマ設定や進め方など、まだまだ課題もあります。基礎ゼミナール懇談会等を通じて、問題意識とノウハウを共有し、基礎ゼミナールのさらなる充実に努めていきたいと思います。



情報リテラシー実践 I・IA の授業改善アンケート等について

情報教育検討部会長
大学教育センター教授
永井 正洋

【はじめに】

情報リテラシー実践 I は、基礎的な情報活用の実践力を育成する科目として設置されている。また、より専門性を高めた授業として情報リテラシー実践 IA（表計算ソフトを利用した統計処理）、情報リテラシー IB（表計算ソフトを利用した基礎的プログラミング）という科目も設定している。現在は、これら 3 科目のうち 1 科目を選択必修として、学部・系・コースが指定しているが、実際には I と IA だけの開講となっている。本稿では、2019 年度の前期末に行った FD 委員会実施の情報リテラシー実践 I・IA に関する授業改善アンケートの結果等について報告する。

【授業評価の方法】

まず、授業改善アンケートの質問項目だが、共通項目が問 1～7、個別質問項目が問 8～10 となっている。個別質問項目については、情報教育検討部会にて設定される。実施状況については、後掲の図中に示した。

【結果と考察】

次ページの図は、FD 委員会が実施した授業改善アンケートの結果である。問 8（満足度）からは、72.2% の学生が受講して満足と感じていることが分かる。また、問 9（難易度）に関しては、現在の学習内容を 23.5% の学生が容易だと思うのに対して、43.8% の学生が難しいと感じており、例えば、情報リテラシー実践 I の学習内容を現在より専門的・応用的なものとする場合は、精査が必要なことを示唆している。次に、問 3（授業外学習時間）からは、授業外での学習について、30 分未満の学生が 73.1%（昨年度 74.9%）いることが示されている。ここで一昨年度が 70.0% であったことを勘案すると、ここ数年、高い値に止まっており留意が必要である。最後に、問 4（知識・能力獲得）を見ると、特に「専門的な知識・技術」、「情報活用能力」を修得・向上できたと回答していることが

分かる。一方、情報倫理の育成に関する要請が多いものの、「8. 倫理観、社会的責任の自覚」の項目については例年あまり高くなく、引き続き、懸案事項となっている。（H26=10.8→H27=8.7→H28=8.9→H29=7.9→H30=10.8→R1=11.1 単位%）

続いて、情報教育検討部会による授業評価アンケートの結果（図は不掲載）に関して報告する。4 つの質問項目からは、学生の 79.1% が、情報リテラシーが身に付いたと回答すると共に、74.9% が意欲的・積極的に授業に取り組んでいることや、69.5% の学生が教員の説明を分かりやすいと思い、また、その対応に 78.1% が満足していることが分かった。

以上、まとめると、おおむね学生は意欲的に授業に取り組み、教員の説明や対応も評価すると共に、情報リテラシーが身に付いたと認識している。さらに、その結果、全般的に授業を受講して満足していたことが示されたといえる。留意すべき点としては、例年と同様に、授業内容をどちらかというとなしと感じている学生が多くいることと、授業外での学習時間が少ない傾向にあることをあげることができる。

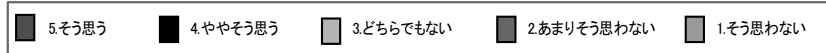
【シニアへの情報教育について】

本年度より、大学教育センターと学術情報基盤センターの情報教育担当では、プレミアム・カレッジ生への情報科目を提供している。一つは「情報リテラシー基礎」であり、主に本学ローカルシステムについて集中講義の形式で 4 月に教授している。また、他一つは「パソコン技術」であり、主に情報活用の実践力の向上を目指して、情報リテラシー実践 I の内容をシニア向けに改修し提供している。まだ立ち上げ 1 年目であり、きちんとした授業実践の評価はできていないが、受講生の意欲の高さは特筆される。また、授業に対して大学生から率直な意見を聞くことはあまりないが、受講生からは多くの声を聞くことができ、今後の情報リテラシー実践 I・IA の授業改善にとっても良い参考となった。

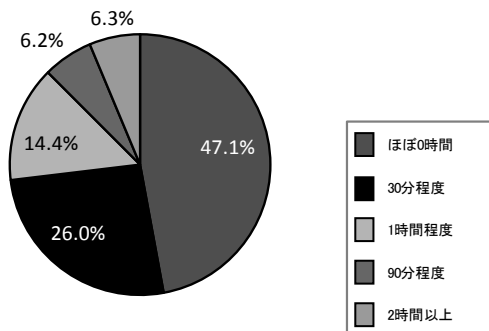
<実施期間> 2019年7月8日(月)～2019年7月26日(金)
 <履修登録者数> 1,671人 <回答者数> 1,240人 <回収率> 74.2%
 <授業科目数> 40クラス <実施科目数> 39クラス <実施率> 97.5%
 <アンケート実施科目における回収率> 75.7%(回答者数/実施科目の履修人数合計)

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.52	1.14		24.3%	24.5%	37.3%	6.8%	7.1%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.85	0.99		25.6%	47.1%	16.9%	6.9%	3.4%
問8 この授業を受講して満足した。	3.93	1.06		34.8%	37.4%	18.4%	4.9%	4.5%
問9 授業全体を振り返って、この授業は難しかった。	3.28	1.12		15.0%	28.8%	32.7%	16.5%	7.0%
問10 チューターは学生の質問・意見に対して適切に対応した。	4.29	0.98		56.1%	24.0%	14.8%	2.5%	2.6%

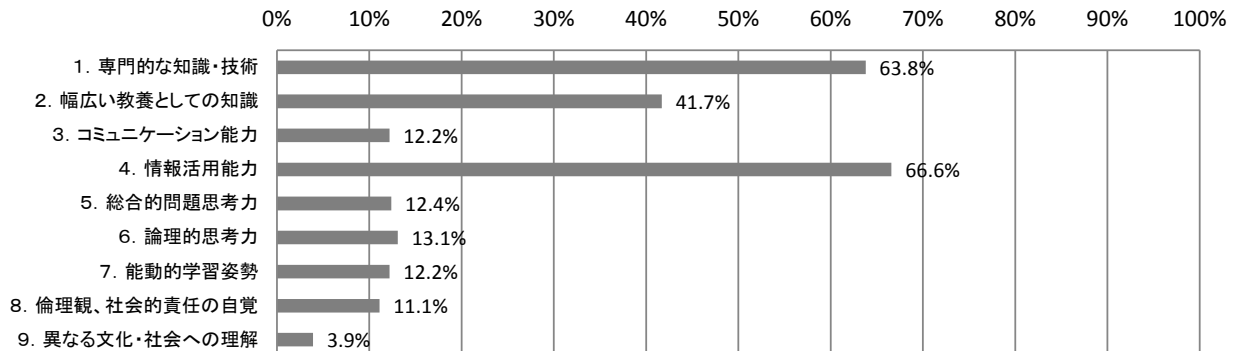
データ数 = 1,240



問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。)



問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



実践英語の授業改善アンケートについて

英語教育分科会座長
人文社会学部人文学科准教授
吉田 朋正

【はじめに】

本学の英語教育は、2013年度に新カリキュラムを導入してから6年目を迎えた。入学時にTOEICを利用したクラス編成テストでレベル分けを行い、統一教科書を使用するBレベルに加え、英語力の高いAレベル、基礎力重視のCレベルを併せて設定し、能力に応じた教材と教育方法によるきめ細かな指導を目指している。Aレベルは約8名、Cレベルは約10名のクラスサイズで運営し、大半の学生の属するBレベルは約20名を基準として、少人数クラスの英語教育を実践している。

【個別の質問事項について】

統一教科書について 例年Bレベルの統一教科書には、1) 文系・理系の別を問わずなるべく幅広い知的好奇心を満たすものであること、また、2) 読解力や語彙力、論理的思考法を育むのに充分役立つものであることの2点を基準とし、本学学生が初年度に学ぶに相応しいテキストを厳正に採択している。

アンケートの問8はこの教科書の難易度を尋ねたものだが、結果の詳細(カッコ内は昨年度の数値、以下同じ)は、「易しい」1.1%(1.8%)「やや易しい」3.5%(5.2%)「ちょうどよい」50.8%(63.2%)「やや難しい」33.7%(24.2%)「難しい」10.9%(4.6%)となっており、半数以上の学生が難易度を「ちょうどよい」と考えていたことが分かる。学力向上にとっては有意と思われる「やや難しい」も含めると八割以上であることから、前年に比してやや難易度は上がったものの、今年度の統一教科書は、全般に適切なものであったと理解される。

今後の学習との関わり 問10「この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか」の質問には、「そう思う」24.1%(22.7%)「ややそう思う」46.7%(46.0%)という結果となった。両者の合計は昨年をやや上回る70.8%(68.7%)となり、平均値も3.79(3.76)という比較的好ましい数値となった。

多くの学生にとって学習効果があったこと、また、今後の英語学習継続への意識が維持されたものと理解している。

【共通の質問事項について】

シラバスについて 問1「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だったか」に対する回答結果は、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて49.2%(48.7%)であった。昨年の48.7%、一昨年の47.0%に比してやや上昇しているが、ほぼ例年通りの評価と考えられる。「どちらでもない」が最も多い34.7%(35.8%)を占めているのは、実践英語Iが必修科目であり、授業の選択とは関わりがないという事実を基とすると捉えており、いまのところ特に問題視していない。

授業の理解度 授業の理解度を尋ねた問2に対する回答は、「そう思う」「ややそう思う」が合わせて76.1%(77.8%)となった。やや数値は下がっているが、昨年引き続き満足のいく数値が維持できていると考える。理解に問題を感じた学生の割合は、昨年度の8.2%(7.3%)とやや上昇しており、今後はこの数字を減らしていけるよう、各授業で工夫を続けていくことが望ましい。

学習時間 問3は一週間の授業外学習時間の平均を尋ねる質問で、「2時間以上」5.8%(8.0%)「90分以上」10.1%(12.6%)「1時間程度」28.4%(27.2%)「30分程度」37.1%(36.4%)「ほぼ0時間」18.7%(15.9%)という結果であった。「1時間程度」以上の割合の合計は44.3%(43.3%)である。2013年から今年度までの経年変化を見ると、年度順に47.8%、50.0%、42.1%、48.6%、47.8%、43.3%、44.3%となっており、50%以下の数値で推移している。これは「30分程度」と「ほぼ0時間」の合計が例年半数以上を占めてきたことを示しており、大いに改善の余地があるものと思われる。予習・復習や自主的学習が必須であるはずの外国語学習においては、この数値をゼロに近づけるべく、授業

外学習の重要性を学生に説くとともに、それを促す課題や授業方法の工夫が今後必要だと考えられる。

「授業で得られるもの」問4は「この授業で修得・向上できた知識や能力」を複数回答可で選択させている。「幅広い教養としての知識」46% (49.9%) 「異なる文化・社会への理解」34.7% (31.5%) 「専門的な技術・知識」22.3% (21.3%) 「能動的学習姿勢」19.6% (19.8%) 「コミュニケーション能力」21.6% (24.6%) という結果はほぼ例年どおりであり、実践英語のシラバスに掲げた「言語の背景にある文化・歴史・倫理などを深く理解し、知的視野を広げる」という目標が、

ある程度達成されているものと評価できるだろう。

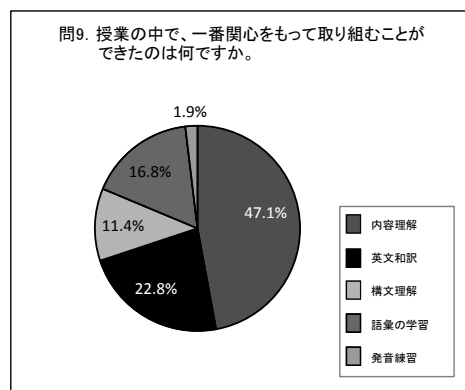
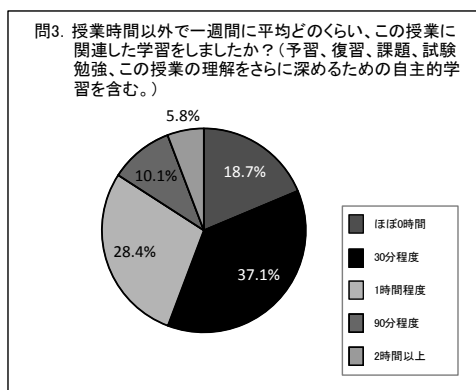
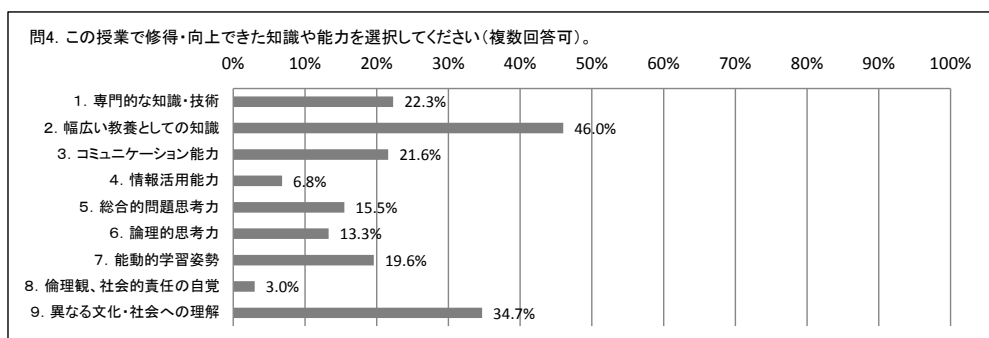
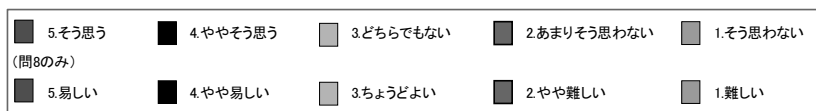
【今後の課題と展望】

新カリキュラム実施後に行われてきたこれまでの授業改善アンケートの結果は、全般に着実な改善傾向を示している。学生の自由記述には、少数ながら不満の声も散見されるが、授業毎のアンケート結果は各教員に確実にフィードバックされている。英語教育分科会では、今後もすべての学生の意見に真摯に向き合うことを各教員に強く促し、全体的な改善の努力を続けて行きたい。

＜実施期間＞ 2019年7月8日(月)～2019年7月26日(金)
 ＜履修登録者数＞ 1,710人 ＜回答者数＞ 1,585人 ＜回収率＞ 92.7%
 ＜授業科目数＞ 92クラス ＜実施科目数＞ 85クラス ＜実施率＞ 92.4%
 ＜アンケート実施科目における回収率＞ 97.7%(回答者数/実施科目の履修人数合計)

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.49	1.11		21.3%	27.9%	34.7%	10.4%	5.6%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.92	0.91		26.0%	50.1%	15.7%	6.3%	1.9%
問8 今年度の統一教科書の難易度はどうでしたか。	2.50	0.78	1.4%	3.5%	50.8%	33.7%	10.9%	
問10 この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか。	3.79	1.01		24.1%	46.7%	17.7%	7.8%	3.8%

データ数=1,585



未修言語科目の授業改善アンケートについて

未修言語科目担当
人文社会学部人文学科教授
園田 みどり

【未修言語科目の目的・目標】

本学では、大学入学後に初めて学ぶ言語科目のことを「未修言語科目」と呼んでおり、「第二群」（ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語）、「第三群」（ロシア語・スペイン語・イタリア語・ギリシャ語・ラテン語）の二つの科目群から構成される。本学では多くの学科が第二群の科目を必修科目、あるいは推奨科目に指定している。未修言語は人文社会学部人文学科の担当教室のコーディネーターと、未修言語科目部会の方を中心とした各言語担当教室の情報交換により、授業の健全な運営と不断の改革が行われてきた。授業（特に初級）の設定する目標は、大学入学後に初めて学ぶ外国語ということ鑑みて以下の二点に集約される。

- ①発音、文法、基本語彙など未修言語の基礎の習得。
- ②異文化に触れ国際的な視野を育むきっかけをもつ。

近年の傾向として、本学では外国語の資格取得を目指す学生が増加していること、本学と世界各地の大学との国際交流提携が推進されていることが挙げられる。また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催控え、英語以外の多様な言語学習と異文化理解の促進のために、未修言語教育はますます重要となりつつある。

【個別の質問事項】

問8は、選択した言語の種別を問う設問である。各項目がどの言語科目に対する回答なのかを把握し、より正確な実態調査を行うために設けられている。ここ数年ほど、中国語とドイツ語が各30%程度、フランス語が20%程度、朝鮮語が10%程度の割合で安定していたが、昨年度から中国語履修者の増加が著しく、本年度はついに48.5%に達した。12.4%の朝鮮語と併せると全体の60%を超え、従来50%を超えていたドイツ語とフランス語を併せたヨーロッパ言語の割合を大幅に超える結果となった。この傾向は続くと見られ、今後の推移が注目される。

問9と問10は2015年度のアンケートから新しく設定された設問で、先に述べた未修言語教育の二つの目標に対応するものである。この質問は、学生の未修言語に対する満足度や要求、異文化理解の程度を反映しており、授業改善に大きな役割を果たしてくれる。

問9は、授業で外国語を学ぶなかで最も有益だった学習内容を問う設問である。受講生は話す・聞く・読む・書くの四技能を総合的に習得していく。どの学習内容に関心をもったのかを理解することで、学生の学習傾向を把握することができる。

結果は、数値の高い順に「文法説明」38.3%、「発音練習」32.8%、「語彙の学習」17.4%、「和訳」8.2%、「外国語作文」3.2%となっており、ここ数年来ほぼ同様の数値で推移している。ただ「文法説明」と「発音練習」とのポイント差が前年度との比較で10.2から5.5へと狭まったのは興味深い。耳学問に偏りがちな「文法説明」よりも、単語や文を声に出して使いながら言語の特性を体得する「発音練習」が数値を伸ばしているのは、日本ではとかく文法偏重と批判される外国語教育および学習が、緩やかに変化しつつある実態を表しているのかもしれない。授業外学習が必要となる「語彙の学習」が若干数値を伸ばしているのに合わせて、「和訳」や「外国語作文」の数値も押し上げたい。「文法説明」の理解を実践的に応用する技能である読む・書く能力に直結するこれらの学習には、授業外学習を促し効果的に取り組めるよう、指導にさらなる工夫が求められる。

問10は、未修言語の授業が異文化への興味・関心を引くきっかけとなったかどうかを問う設問である。そうした関心を抱くことで、海外留学などを視野に入れて学習を続けていくモチベーションともなるだろう。結果は、「そう思う」「ややそう思う」が昨年度よりもさらに数値を伸ばして全体の90%近くにまで及んでいる。未修言語の習得が言語の習得だけでなく、異文化理解への契機になっていることがわかる。実際、それぞれの教員は、写真やDVD教材、音楽などを使用して外国文化の紹介をうまく授業に取り入れており、この結果に大いに貢献している。

【共通の質問項目】

問1で問われた「シラバスの有用性」については、「そう思う」「ややそう思う」が56.5%と、50%を過去四年度では最も高い数値で上回っているため、シラバスの有用性はある程度実証されていると言えよう。一方で、「どちらでもない」「そう思わない」「あまりそう

「思わない」がまだ40%以上を占めている事実も無視できない。2020年度にはカリキュラム・マップの見直しによって、未修言語科目の特性に合ったシラバスへの書き換えが見込まれており、改善が期待できるだろう。

問2の授業理解に関する質問については、「そう思う」「ややそう思う」は、一昨年度70.6%、昨年度74.8%を上回って80%に迫る数値となり、高い理解度を示している。

問3については、授業以外での学習時間が90分程度以上の割合は7.8%で、昨年度の5.7%よりも若干上昇した。逆に週1時間程度以下の割合は75.1%で、昨年度の75.7%と同様高い数値を示し、「ほぼ0時間」の学習者も17.0%（昨年度18.6%）おり、これらの学生に、主体的能動的な学習姿勢を促すことが課題となっている。

問4での、授業を通して得られた知識・能力として、「専門的な知識・技術」「幅広い教養としての知識」「コミュニケーション能力」「異なる文化・社会への理解」がいずれも、昨年度を上回る高い数値を示しており、未修言語科目の教育目的はおおむね達成されていると評価できる。言語の習得には主体性が不可欠であるが、

「能動的学習姿勢」が13.2（昨年は9.8%）と若干上昇したものの低い数値であることに変わりはなく、指導に工夫が求められる。

【全体的な傾向と今後の課題】

選択言語の割合以外は、前年度調査より大きな変動はなく、項目によっては若干の改善傾向も見られ、未修言語学習が依然として安定した成果を上げていると言える。ドイツ語・フランス語・中国語に関しては、担当教員の多大な尽力もあり、交換留学制度が充実している。長期留学だけでなく、夏期・春期休暇中の短期研修も整備されていることは学習の継続へのモチベーションとなっている。2018年度から単位化（2単位）されたので、利用希望者の増加が期待される。

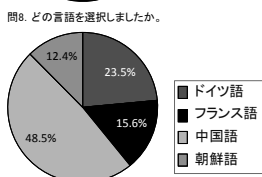
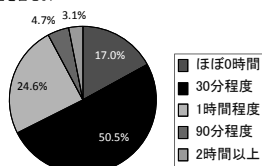
今後の課題として、学生側にはやはり学習時間の確保が重要だろう。言語の習得は、どうしても時間が必要である。新しい言語を学ぶには、授業の復習・予習を通じて、基礎を少しずつ確実なものにするしかない。教員側では、外国語の教授を通じて、外国の歴史や文化について折に触れて話したり、ヴィジュアルで見せたりするなど、受講生の学習意欲を高める工夫がいくつか必要である。

〈実施期間〉 2019年1月4日（金）～2019年1月25日（金）
 〈履修登録者数〉 2,255人 〈回答者数〉 1,717人 〈回収率〉 76.1%
 〈授業科目数〉 104クラス 〈実施科目数〉 84クラス 〈実施率〉 80.8%
 〈アンケート実施科目における回収率〉 93.3%（回答者数/実施科目の履修人数合計）

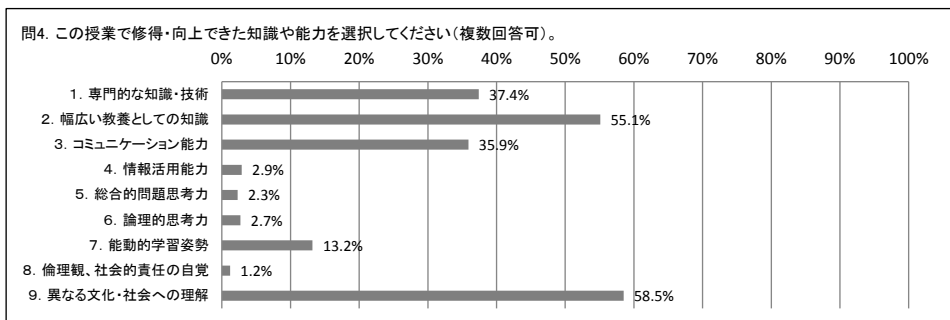
設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.67	1.02		24.6%	31.9%	32.9%	7.5%	3.1%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.93	0.87		23.7%	55.0%	13.5%	6.2%	1.7%
問9 授業の中で、一番役に立つと感じたのは何ですか？	2.10	1.19	3.2%	8.2%	17.4%	32.8%	38.3%	3.3%
問10 この授業はあなたの異文化理解のきっかけとなりましたか？	4.16	0.86		37.9%	47.2%	9.9%	3.3%	1.7%

データ数 = 1,717

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？（予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。）



- 5.そう思う
- 4.ややそう思う
- 3.どちらでもない
- 2.あまりそう思わない
- 1.そう思わない
- (問9のみ)
- 5.和訳
- 4.外国語作文
- 3.語彙の学習
- 2.発音練習
- 1.文法説明



理系共通基礎科目の授業改善アンケートについて

理学部 FD 委員会委員長
理学部化学科准教授
中谷 直輝

【理系共通基礎科目の目的・目標】

本学では、数学、物理、化学、生物学などの自然科学分野における基礎的な内容を取り扱う一般教養科目を、「理系共通基礎科目」として全学部学生を対象に開講している。2019 年度前期は、数理科学、物理学、化学、生命科学の理学部 4 学科が提供する科目、および旧・電気電子工学コース、旧・機械工学コースが提供する科目を含めた 6 分野・計 22 科目 58 クラスが開講され、内 49 クラスで授業改善アンケートが実施された。本科目群は、理系学部・学科において、少なくとも関連分野の科目が必修科目として設定されており、また他分野の科目についても一定数を修得することが卒業要件となっている。

【理系共通基礎科目・独自質問項目】

2019 年度前期の授業改善アンケートは、対象となる 55 クラスの内、49 クラスで実施され、のべ 3,355 人から回答が寄せられた。対象となる受講者に対する回収率は 86.9% と、全体的に見ても比較的高い回収率を維持している。また、理系共通基礎科目に関する独自質問項目としては、以下の 3 つの質問項目を設定した。

問 8. 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？

問 9. あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？

問 10. この授業のテーマは自分の関心にあっていた。

これらの設問は、回答の経年変化を追跡する目的から前年度までに実施されたものと同じ内容となっている。個別のアンケート結果に着目すると、問 8 のクラスの数については「ちょうどよかった」と回答した学生が 73.3% となっており、2018 年度の 71.4%、2017 年度の 70.8% と比べても続伸していることが分かる。2018 年度の学部再編の影響が懸念される項目であったが、その影響がプラスに作用したと考えられる。

問 9 については、2018 年度から設定した質問項目のため、有意な経年変化は得られないが、回答分布は 2018 年度とほぼ同様となった。「ちょうどよい」と答え

た学生が約半数の 48.4% となった一方で、「難しい」「やや難しい」と答えた学生の合計も 48.9% と、拮抗した結果となった。また、「易しい」「やや易しい」と答えた学生は 2.7% と非常に少なく、単位の質保証や専門性の高い知識・技能の習得という観点で見れば、ある意味では望ましい結果とも言える。他方で、講義形態や授業内容の改善、授業外学習時間の確保を促す取り組みなど、FD が担うべき役割は大きく、本学の学修レベルを下げずにいかにこれらを達成するか、が今後の課題と言える。

問 10 については、回答分布は 2018 年度とほぼ同様となった。しかし、「そう思う」「ややそう思う」の割合は、合計でも 38.6% と高くはない。学生各人が興味を持っている分野はさておき、そうした興味のある分野に他の分野がどのように繋がってくるか、を学生に伝える努力はすべきであろう。授業担当者の努力はさることながら、こうした科目間の連携強化を FD として主導することも、今後求められるのではないだろうか。

【共通の質問項目】

共通の質問項目のアンケート結果に注目すると、問 1 のシラバスに関する項目、問 2 の授業の理解度に関する項目では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた学生の合計が、それぞれ 51.9%、57.0% と、2018 年度と比べても、それぞれ 1.7 ポイント、2.0 ポイントの増加となっており、年々向上している。これらの項目は、FD セミナー等の成果が表れやすいと考えられるので、部局 FD セミナーの開催等を通して、今後のさらなる向上に繋がりたい。

問 4 については、「専門的な知識・技術」が向上したと答えた学生の割合が 66.0% と最も多く、次いで「論理的思考力」の 31.9%、「幅広い教養としての知識」の 27.3% と続いている。専門的な知識や論理的思考力は、自然科学分野において必須と言える知識や能力であるため、当然と言えば当然の結果であるが、理系共通基礎科目がその役割をきちんと果たしていることの証左である。

【授業外学修時間の経年変化について】

問3の授業外学習時間について、2012年度から2019年度の前期開講科目に対する経年比較を見てみると、理系共通基礎科目では、「1時間以上」と答えた学生の割合が40～45%と、基礎ゼミや外国語科目と同程度の比較的高い水準で推移している。2018年度との比較では、1.4ポイントの増加となっているが、2018年度が少々低かったこともあって、全体的に見れば2019年度は平均的と言える。しかしながら、授業外学修時間の推移は頭打ちとなっているのが現状で、kibacoを活用した予習・復習課題の提供や、アクティブ・ラーニングの導入等、授業外学修時間の確保のための何らかの対策を促すことが課題となってくる。

【今後の課題と展望】

理系共通基礎科目に関する授業改善アンケート全体を通して、2018年度の学部再編の影響がどちらかと

言えばプラスに作用していることはポジティブな要素である。しかしながら、講義の質という点では、ある一定の水準に到達し、これ以上の改善が難しくなっているのが現状と言える。部局FDセミナーやアクティブ・ラーニングセミナーの活性化等、これまでのFD活動を継続していくことは、現在の水準を維持する上で当然必要であると考えられる。他方で、教学IRによるデータ分析の活用等、学習成果の客観的な評価やカリキュラム上の問題点の調査を行うことで、より効率的・効果的にFD活動の目標を設定し実施することが、さらなる授業改善に向けて重要になると考えている。

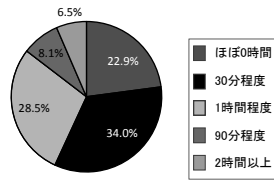
本稿で俯瞰した授業改善アンケートの集計結果は、平均化された個性の薄いものであるが、そこに埋もれた学生個人の声をデータ分析によって聞くことで、今後のFD活動に繋がる何らかのヒントが得られれば幸いである。

＜実施期間＞ 2019年7月8日(月)～2019年7月26日(金)
 ＜履修登録者数＞ 3,861人 ＜回答者数＞ 3,355人 ＜回収率＞ 86.9%
 ＜授業科目数＞ 55クラス ＜実施科目数＞ 49クラス ＜実施率＞ 89.1%
 ＜アンケート実施科目における回収率＞ 91.5%(回答者数/実施科目の履修人数合計)

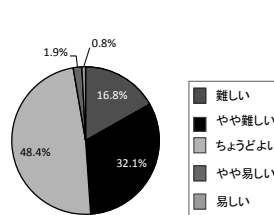
設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.57	1.01		20.0%	31.9%	36.6%	7.7%	3.8%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.45	1.08		14.3%	42.7%	23.1%	14.0%	6.0%
問8 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？	3.25	0.65	6.3%	17.1%	73.3%			2.3%
問10 この授業のテーマは自分の関心にあっていた。	3.24	1.00		10.4%	28.2%	42.0%	14.1%	5.4%

データ数=3,355

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。)

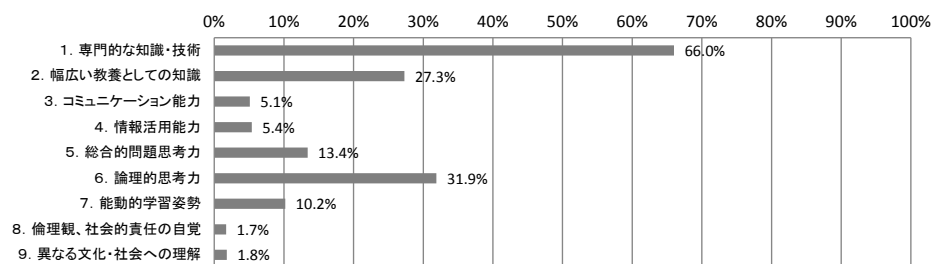


問9. あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？



- 5. そう思う ■ 4. ややそう思う ■ 3. どちらでもない ■ 2. あまりそう思わない ■ 1. そう思わない
- (問8のみ)
- 5. 多かった ■ 4. やや多かった ■ 3. ちょうどよかった ■ 2. やや少なかった ■ 1. 少なかった

問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



保健体育科目の授業改善アンケートについて

基礎教育部会・保健体育科目担当
大学教育センター准教授
西島 壮

【保健体育科目の目的・概要】

保健体育科目は、身体や運動に関する幅広い知識を学び、知的・身体的な教養を身につけ、心身ともに健康で豊かな人間性を育むことを目的としている。身体運動学（理論、2単位）、身体運動演習（演習、2単位）、スポーツ実習（実習、1単位）とコンセプトの異なる3つの科目から構成されており、学生は自らのニーズに応じて自由に選択し履修することができる。身体運動演習は、共通の測定実習（第2～4週）を行った後、第5週目以降はスポーツ種目（前期18種目、後期7種目）ごとに分かれて授業を実施する。スポーツ実習では、定時の授業時間帯で実施する定時コース（前期8種目、後期11種目）に加えて、長期休暇中に実施する集中コース（夏季2種目、冬季1種目）を提供している。

【アンケートの実施状況について】

保健体育科目では、これまで独自に授業評価アンケートを行っていたが、2017年度から身体運動学を、そして2018年度から全ての実技科目を全学共通科目と同じフォーマットで実施することとなった。したがって、本FDレポートに保健体育科目の授業改善アンケート結果を報告するのは、今回が2回目となる。なお本アンケートでは科目別に集計・分析を行っておらず、3科目全体での結果となる。2019年度前期のアンケート回答科目は27クラス（実施率100%）、回答者数は549人（履修登録者の94.5%）であった。

【個別の質問項目について】

個別の質問項目は、昨年度の反省を踏まえ、一部変更して設定した。問8（昨年度の問9）では、「この授業によって運動やスポーツへの関心が高まったか」を尋ね、「そう思う（62.4%、昨年比+3.8%）」と「ややそう思う（29.5%、+0.1%）」と回答した学生は合わせて91.9%（+3.9%）であり、昨年度と同様高い評価であった。問9では、新たに総合評価として「この授業

を受けて満足したか」を尋ねたところ、「そう思う（72.6%）」と「ややそう思う（20.7%）」と回答した学生は合わせて93.3%と極めて高い評価であった。以上2つの質問に対する結果から、保健体育科目全体を通じて、履修した学生が運動・スポーツに対する関心を向上でき、満足感を感じられる有益な授業を提供できたと言えよう。ただし、保健体育科目は選択科目であるため、もともと運動・スポーツに関心の高い学生が多く履修しており、その結果、このような高い評価になった可能性も考えられる。この評価に甘んじることなく、引き続き授業の改善に努めたい。

問10では、次学期以降に履修したい種目の希望を尋ねた。その結果、球技系（48.7%）、ラケット・バット系（27.0%）、フィットネス系（15.3%）、レクリエーション系（11.4%）の順で希望が多かった。この割合はほぼ今年度が開講している種目数とほぼ同じであったため、今後も現在の種目バランスを維持するのが望ましいと考えている。

【共通の質問項目について】

問1で問われたシラバスの有用性については、「そう思う（45.0%）」と「ややそう思う（33.8%）」と回答した学生は合わせて78.8%（昨年比+4.4%）であり、昨年度とほぼ同水準であった。保健体育科目では2018年度から、全ての授業（スポーツ種目）を共通シラバスに掲載するように改善した。また、たとえ実施するスポーツ種目及び授業担当者が異なったとしても身体運動演習（あるいはスポーツ実習）は同じ授業方針・テーマの下で実施していることから、共通の記載内容を定めシラバスに記載した。このような改善により、比較的高い評価が継続して得られているのだろう。

問2で問われた授業の理解度は、「そう思う（57.3%）」と「ややそう思う（34.8%）」と回答した学生は合わせて92.1%（昨年比+4.1%）であり、授業の難易度は適切であったと考える。

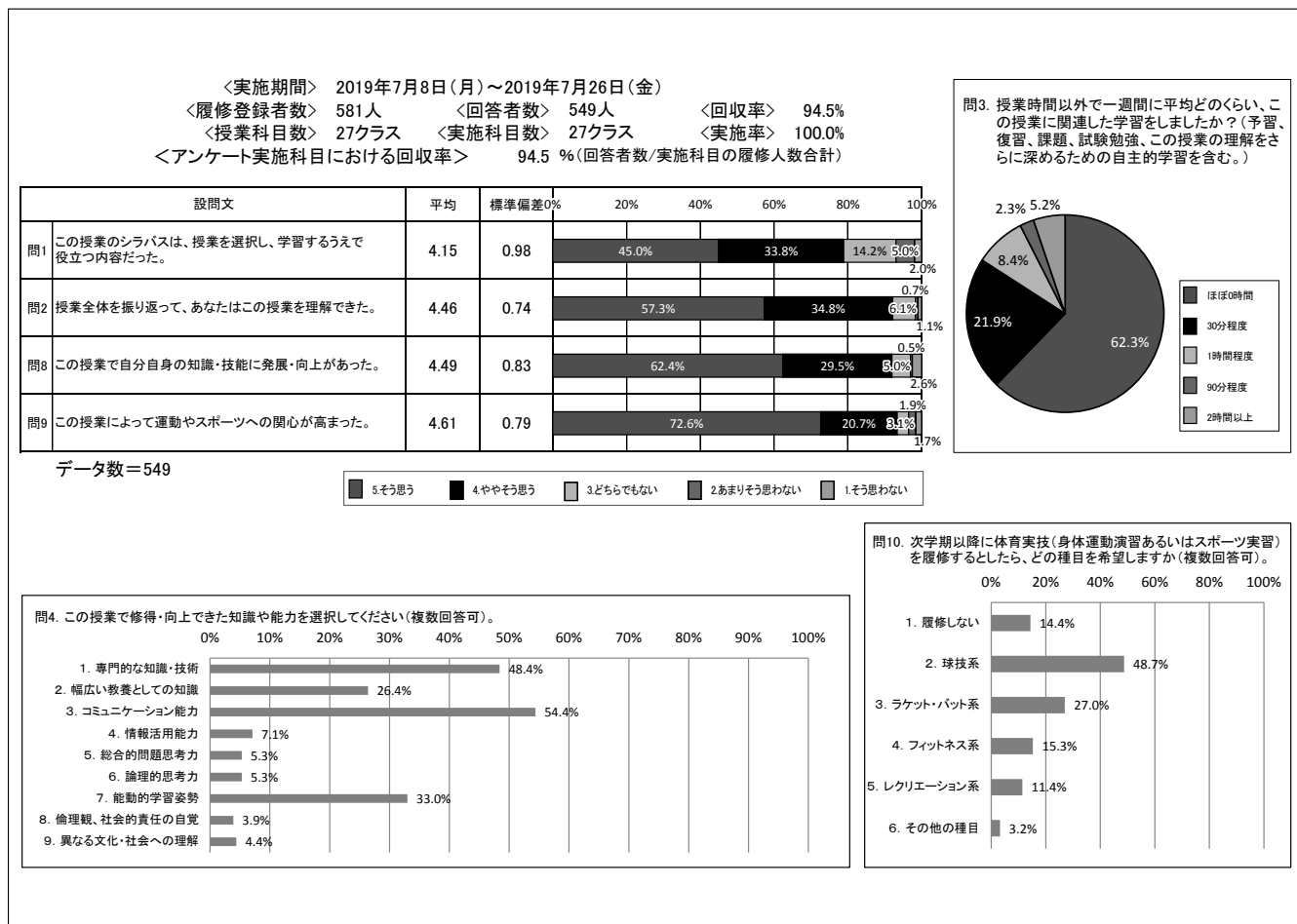
問3で問われた1週間に平均的な授業外学習時間については、「ほぼ0時間(62.3%)」と「30分程度(21.9%)」と回答した学生は合わせて84.2%(昨年比+0.2%)であった。この授業外学習時間の少なさは、現在の保健体育科目が抱える最も重要な課題と考える。ただしこの原因として、教員と学生がそれぞれ考える授業時間外学習の内容の相違が生じている可能性も否定できない。例えば身体運動演習では、シラバスの授業外学習欄に「日常生活における身体活動量の増加に努める(駅では階段を使う、最寄り駅まで歩く、など)」と指示しているが、身体活動量の増加に努めることが学習の一環になっていると認識している学生は少ないと想定される。今後は、実技科目で求められている授業外学習の目的およびその具体的内容について、学生に周知することにも努めたい。

問4で修得・向上できた知識や能力を問うたところ、約5割の学生が「専門的な知識・技術(48.4%、-7.9%)」、「コミュニケーション能力(54.4%、+2.0%)」を挙げた。特にスポーツはコミュニケーションを円滑にする極めて有効な手段であり、そのスポーツを介した教育の場である保健体育科目は、コミュニケーション能力を高

める絶好の機会となる。今後も、スポーツを通じたコミュニケーション能力の向上を重視し、その意義を学生に伝えていきたい。続いて約3割の学生が「能動的学習姿勢(33.0%、+3.7%)」、「幅広い教養としての知識(26.4%、+0.8%)」を挙げたが、それ以外の5項目を挙げた学生は1割に満たなかった。これを科目特性として仕方がないと捉えるのではなく、保健体育科目でもこれらの能力を向上させることができないか、検討していきたい。

【今後の課題と展望】

冒頭でも述べたように、全学共通科目と同じフォーマットで授業改善アンケートを実施したのは今回が2回目であった。今後は、他の全学共通科目と比較して保健体育科目がどのような評価の位置づけにあるかを相対的にも理解し、保健体育科目の授業改善に継続的に取り組んでいきたい。また近年は保健体育科目の受講者数が減少傾向であることも、大きな課題である。受講者数の増加も大きな課題ととらえ、取り組んでいきたい。



教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて

基礎教育部会長
人文社会学部人文学科教授
谷口 央

【はじめに】

全学共通科目である教養科目群・基盤科目群は、それぞれ科目群別に、学生が自身の所属する分野の内外を問わない幅広い教養知識を身につけること、今後の専門科目を効率よく身につけるための基礎となる知識や技法を習得すること、そして、社会人・職業人としての基礎能力と産業構造等の変化に対応できる柔軟な専門性と創造性を身につけること、以上を主な目的として開講される科目となる。

教養科目は現代社会で起きている様々な事象をテーマとするが、そのテーマは①都市・社会・環境、②文化・芸術・歴史、③生命・人間・健康、④科学・技術・産業の4つと、3・4年次の履修科目である総合ゼミナールに分類される。基盤科目は各分野における専門教育の基礎となる科目群で、①人文科学領域、②社会科学領域、③自然科学領域、④健康科学領域の4つの領域に分かれる。これら科目群は、特定のテーマ・領域に偏らないよう、幅広く履修することが求められている。

全学共通科目は、多くの学生が1、2年次に履修することもあり、科目数及び履修者数が多い。それだけに、多数のデータを取得することが可能で、今後も授業改善アンケートを継続していく必要がある。

【授業改善アンケート実施状況】

2019年度前期の全学共通科目の授業改善アンケートは、78クラス中65クラスで実施された。実施率は83.3%と昨年度の86.3%から下落となる。履修登録者は10,932人、回答者は7,485人となる。回収率は68.5%で、こちらも昨年度の73.1%から下落となる。ただ、アンケートが実施された科目のみの回収率は昨年度の81.1%から85.9%と上昇する。このことから、有効回答数を維持・増加させるために、担当教員へアンケート実施を強く要請していくことが求められる。

【評価結果】

問1は、シラバスが授業を選択・学習するうえで役に立ったかについてである。「そう思う」「ややそう思う」は、それぞれ27.0%と36.6%、この合計は63.6%となる。これは昨年度の61.2%を超えている。近年、全学的にシラバスの記載方法についての充実が図られ、教員・職員も作業努力をしているが、今回はその効果がわずかではあるが現れたと考えられる。一方で、「あまりそう思わない」「そう思わない」は、それぞれ6.7%、3.7%と、昨年度の6.6%、3.1%からほぼ横ばいである。今後も、より多くの学生がシラバスを有効利用していただけるよう、記述方法・内容について工夫していく必要がある。

問2は、授業理解度である。上位の「そう思う」「ややそう思う」は、それぞれ18.1%と46.7%となり、合わせると64.7%となる。これは昨年度の15.9%、46.3%からわずかとは言え上昇している。一方で、「あまりそう思わない」「そう思わない」は、それぞれ11.0%、3.9%と、昨年の11.6%、3.4%と比べてほぼ横ばいである。GPAの導入等もあり、全ての学生が理解することを授業内容とすることは難しく、この点で言えば目的は達成できているように思われる。一方で、教養・基盤・キャリア教育の各科目の目的を考えると、これで満足するのではなく、今後も引き続き授業内容・方法について検討する必要があると思われる。

問8は、授業難易度についてである。理解度の高い「易しかった」「やや易しかった」は、それぞれ13.3%、30.4%となり、続く「ちょうどよかった」は52.3%と全体の半数を越え、これらの合計は96%を占める。問2の授業理解度に比べて数値が高いことから、難易度は高くないが授業自体を理解できないと感じる学生が多いと言う結果が示されることになる。このようなことから、授業の難易度としては適正と判断される。なお、昨年度と比べるとほぼ横ばいの結果となっている。

問4は、授業により取得できた知能・能力についてである。昨年度同様、「専門的な知識・技術」「幅広い

教養としての知識」が取得できたと認識されている。これは全学共通科目の目的とも合致しており、今後も継続していくことが求められる。

問9は、授業によって得た知識の度合いを示す視野が広がったか否かについてである。上位の「そう思う」「ややそう思う」は、それぞれ24.4%と47.4%となり、合わせると71.8%となる。また、「ややそう思う」は昨年度の47.6%と比較するとほぼ同値であるが、「そう思う」は20.9%から3.5%の上昇となっている。そのため本項目については、目的の達成はできたと判断して良いと思われる。

問3の時間外学習時間については、ほぼ0時間が50.4%と過半数を占める。ただ、昨年度の62.5%からは大幅に減少している。増加しているのは30分程度の32.0%（昨年度21.8%）で、0時間だった者の大半が30分程度の授業外学習時間を持つように変化したことが確認できる。この上昇は喜ばしいことであるが、一方で過半数が相変わらず0時間であることは問題で、今後も時間外学習時間を増やすような授業設計に努めていく必要があると言える。

問10は授業のクラス人数についてである。こちらは

「ちょうどよかった」が57.9%と高い。ただ、昨年度の同項目62.5%と比較すると4.6%の下落となる。また、「多かった」「やや多かった」の合計は34.2%と昨年度とほぼ同数値である。学生が受講したい科目を制限することは望ましくはないが、授業の質を維持することは重要である、時間割の見直しなど、受講生の偏りができる限り防ぐ方策を検討していく必要がある。

【今後の課題】

全学教育科目である教養科目群・基盤科目群の授業アンケートは、回収数も多く、また全学部に渡る学生からの意見の反映でもあり、今後も継続的に行っていく必要がある。

アンケートの結果から、授業の内容・理解度については個別の努力による対応が改めて確認され、物理的な授業の質保証である各クラスの人数については、教員・職員全体の努力を今後も継続して行う必要性が浮き彫りになった。ここで明らかになった課題を次年度に向けた努力目標の一つと認識し、少しでも授業全体の質的な向上を目指していきたい。

＜実施期間＞ 2019年7月8日(月)～2019年7月26日(金)
 ＜履修登録者数＞ 10,932人 ＜回答者数＞ 7,485人 ＜回収率＞ 68.5%
 ＜授業科目数＞ 78クラス ＜実施科目数＞ 65クラス ＜実施率＞ 83.3%
 ＜アンケート実施科目における回収率＞ 85.9%(回答者数/実施科目の履修人数合計)

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.77	1.04		27.0%	36.6%	26.1%	6.7%	3.7%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.64	1.02		18.1%	46.7%	20.2%	11.0%	3.9%
問8 授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？	2.48	0.81	1.5%	2.5%	52.3%	30.4%	13.3%	
問9 この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか？	3.85	0.94		24.4%	47.4%	20.1%	5.2%	2.8%

データ数=7,485

